

日本に数学が伝わったのは、飛鳥・奈良時代に中国からといわれています。この時期は、一部の役人の人達が学ぶものでした。室町時代になると、そろばんが伝わったり、商人などの計算をすることが生活の一部になる人達も出てきましたが、学問としての数学は発達しませんでした。

数学が学問として広がり、多くの人々が数学を学びだしたのは江戸時代になってからです。

江戸時代になると、普通の人々も商売や生活をするための計算力・学力が必要になってきて、寺子屋などで勉強をするようになりました。人々の教育や学問に対する関心も高まり、数学を教えたり学んだり研究したりする人々が生まれ、学問としての数学も発達していったのです。

この時代は、一部の国を除き、外国との交易がありませんでしたので、数学も日本独自に発達していくことになります。(後に、外国から伝わる数学を「洋算」、それに対して日本の数学を「和算」と呼ぶことになります。)

この時代の数学として興味深いのは、生活に密着した題材を使った問題が多く作られ、人々の娯楽としての一面もあったことです。(「つるかめ算」や「旅人算」などもこの時代に生まれた問題です。)

「和算」の中でも、難しい計算が必要でなく、パズルのようでとても楽しい、油分け算をみてみましょう。

問題 ^{とおけ}1斗桶の中に油が1斗(1斗 = 10^{しゅう}升)入っています。この油を7^{ます}升枡と3升枡を使って、5升と5升到分けなさい。

1斗 (10 升) 7 升 3 升

1升は約1.8

いきなりでは、ちょっと大変ですので、簡単な例題を見てみましょう。

<例題> 5 の水が入った水そうと、3 と2 の水が入る容器があります。この2つの容器を使って水を1 と4 に分けてみましょう。

3 の容器に水を満たす。 2 の容器に水を分ける。 水そうにもどす。

油分け算のルールは、枡(容器)は目盛りがなく、その容積を満たしたときだけ容量がわかるということです。では、以上のことから問題を解いてみましょう。

< 解答例 >

